# 故山中良知先生を偲んで

関西学院大学社会学部長
倉　田　和四生

六月三日早朝，甲山の麓をマラソン中の山中良知先生が，突然，神に召されました。

山べにむかいてわれ　目をあぐ，
助けはいずかたより　きたるか。
　あめつちのみかみより
　たすけぞわれにきたる。

先生が愛唱されていた讃美歌301番の言葉のように，仁川の源流のせせらぎが聞こえ，眼前にせまる甲山を仰げば，連なって天に到る思いのする，まことに先生にふさわしい場所で永眠されました。

山中先生は昭和35年，社会学部創設と同時に四国学院から移って来られ，創設期の苦労を分かちあった一員でありました。それ以来，16年余，学部の充実のため，学問研究の水準を向上させるために非常に大きな働きをなさいました。

まず研究活動としては，この間に二冊の立派な著書を公刊されました。すなわち『理性と信仰』と『宗教と社会論理』は，いずれも，内外から高く評価されています。このことは『理性と信仰』が大韓神学校教授によって韓国語に翻訳されたことの一事からも明らかなところです。さらに翻訳として，スキルダーの『キリストと文化』を昭和49年に出版されましたが，読む人の心をとらえて離さない名訳といわなければなりません。

論文は多数にのぼりますが「聖書における労働の意義」は先生でなければ書けない貴重な遺産といえます。

「キリスト教哲学」を綜合する段階にあった先生をいまここで，急に，失なったことは惜んでも余りあるものがございます。

愛の実践者であった先生は，当然，学部の活動にも大いに献身されました。その中でも最も重要なことは，紛争の真ただ中で，一年間，学部長を勤められたことです。昭和44年当時，関西学院大学はキャンパスを追われ，学外でかろうじてゼミナール等の授業を続けていた状態であったため，役職を進んで引受ける人はなく，苦悩に満ちた時期でした。昭和44年2月末ごろ，私は教務副主任を勤めていましたが，学部長は病気で休まれ，教務主任は本部に取られて不在だったため，一人で困惑していました。そのような時，山中先生が教務主任を引受けられ大変勇気づけられました。そのあと，昭和44年4月から，学部長に就任され，敢然として困難に立ち向い，立派に危機を乗切られたのであります。私は教務主任として先生の側に居ましたので，先生がいかに御苦労なさったか，或る程度，知っているつもりです。先生が最も苦心されたことは，外からの圧力ではなく，内部の危機でした。「どんなことがあっても割ってはならない，それは自分の人格の分裂だから。」としみじみと，自分にいいきかせるように話されたことを，私は決して忘れることが出来ません。

心の疲れを十分に癒やすいと間もなく，オランダに留学された先生は，あれほど愛された彼の地にさえ安住することが出来ず，予定を早めて帰学されました。天命を縮めた遠因が，学園紛争中の過度の御心労にあったのではないかという思いを，私はいつまでも拭いさることが出来ず，胸をいためています。

社会学部を熱愛された先生は，学部の向上に思いを残し，私達に思いを託して召天されました。私達はいま思いを新たにして，先生の御意志を継承発展させるため，日日学問の研鑽に努めなければなるまいと思います。